

[B年] 復活節第3主日(2023年4月23日)**【旧約聖書日課】 イザヤ書 51章1～6節**

1 わたしに聞け、正しさを求める人

主を尋ね求める人よ。

あなたたちが切り出されてきた元の岩掘り出された岩穴に目を注げ。

2 あなたたちの父アブラハム

あなたたちを産んだ母サラに目を注げ。

わたしはひとりであった彼を呼び

彼を祝福して子孫を増やした。

3 主はシオンを慰め

そのすべての廢虚を慰め

荒れ野をエデンの園とし

荒れ地を主の園とされる。

そこには喜びと楽しみ、感謝の歌声が響く。

4 わたしの民よ、心してわたしに聞け。

わたしの国よ、わたしに耳を向けよ。

教えはわたしのもとから出る。

わたしは瞬く間に

わたしの裁きをすべての人の光として輝かす。

5 わたしの正義は近く、わたしの救いは現れ

わたしの腕は諸国の民を裁く。

島々はわたしに望みをおき

わたしの腕を待ち望む。

6 天に向かって目を上げ

下に広がる地を見渡せ。

天が煙のように消え、地が衣のように朽ち

地に住む者もまた、ぶよのように死に果てても

わたしの救いはとこしえに続き

わたしの恵みの業が絶えることはない。

【使徒書日課】**コリントの信徒への手紙一 15章50～58節**

50 兄弟たち、わたしはこう言いたいのです。肉と血は神の国を受け継ぐことはできず、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐことはできません。51 わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。52 最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、

一瞬のうちです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます。53 この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります。54 この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。

「死は勝利にのみ込まれた。」

55 死よ、お前の勝利はどこにあるのか。

死よ、お前のとげはどこにあるのか。」

56 死のとげは罪であり、罪の力は律法です。57 わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。58 わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです。

【福音書日課】 ルカによる福音書 24章36～43節

36 こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。37 彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。38 そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。39 わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおり、わたしにはそれがある。」40 こう言って、イエスは手と足をお見せになった。41 彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。42 そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、43 イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書 51章1～6節

- 1 聞け、義を追い求める者たちよ
主を探し求める者たちよ。
あなたがたが切り出されてきた岩に
掘り出された石切り場の穴に目を留めよ。
- 2 あなたがたの父アブラハムに
あなたがたを産んだサラに目を留めよ。
私は彼が一人であったとき呼び出し
祝福し、子孫を増やした。
- 3 主はシオンを慰め
そのすべての廃虚を慰め
荒れ野をエデンのように
荒れ地を主の園のようにされる。
そこには喜びと楽しみ、感謝と歌声がある。
- 4 私の民よ、心して聞け。
私の国よ、私に耳を傾けよ。
教えは私から出て
私は私の公正をもちもろの民の光とする。
- 5 私の正義は近く、私の救いは現れた。
私の腕はもろもろの民を裁く。
鳥々は私を待ち望み
私の腕に期待する。
- 6 目を天に上げよ。
また、下の地を見よ。
天が煙のように散りうせ、
地が衣のように擦り切れ
そこに住む者たちは、ぶよのように死ぬ。
しかし、私の救いはとこしえに続き
私の正義は挫けることはない。

コリントの信徒への手紙一 15章50～58節

50きょうだいたち、私はこう言いたいのです。
肉と血は神の国を受け継ぐことはできません。
また、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐこと
もありません。51ここで、あなたがたに秘儀
〔あるいは神秘〕を告げましょう。私たち皆が
眠りに就くわけではありません。しかし、私
たちは皆、変えられます。52終わりのラッパの響き
がとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラ

ッパが鳴り響くと、死者は朽ちない者に復活し、
私たちは変えられます。53この朽ちるものは朽
ちないものを着、この死ぬべきものは死なな
いものを必ず着ることになるからです。54この朽
ちるものが朽ちないものを着、この死ぬべきも
のが死なないものを着るとき、次のように書か
れている言葉が実現するのです。

「死は勝利に呑み込まれた。

55 死よ、お前の勝利はどこにあるのか。

死よ、お前のとげはどこにあるのか。」

56死の棘は罪であり、罪の力は律法です。57私た
ちの主イエス・キリストによって私たちに勝利
を与えてくださる神に、感謝しましょう。58私の
愛するきょうだいたち、こういうわけですから、
しっかり立って、動かされることなく、いつも
主の業に励みなさい。あなたがたは自分の労苦
が、主あって無駄でないことを知っているか
らです。

ルカによる福音書 24章36～43節

36こう話していると、イエスご自身が彼らの
真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるよう
に」と言われた。37彼らは恐れおののき、霊を見
ているのだと思った。38そこで、イエスは言われ
た。「なぜ、取り乱しているのか。どうして心
に疑いを抱くのか。39私の手と足を見なさい。ま
さしく私だ。触ってよく見なさい。霊には肉も
骨もないが、あなたがたが見ているとおり、私
にはあるのだ。」40こう言って、イエスは手と足
をお見せになった。41彼らが喜びのあまりまだ
信じられず、不思議がっていると、イエスは、
「ここに何か食べ物があるか」と言われた。42そ
こで、焼いた魚を一切れ差し出すと、43イエスは
それを取って、彼らの前で食べられた。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・4月23日「復活節第2主日」の日課主題は「復活顕現(2)」。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、バビロン捕囚から解放された民にシオンへの帰還を呼びかける預言の箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙一」から、復活について説明を展開する章句の末尾箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、エルサレムで弟子たちの集まるところに復活のイエスが顕現された様子を伝える箇所。

旧約日課(イザヤ 51章より)

・「イザヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第一に置かれた預言書。イザヤ書は、前8世紀末の南王国で四代の王に仕えた歴史上の「宮廷預言者イザヤ」に帰される預言書であるが、「宮廷預言者イザヤの預言の書」に依拠するのは1~39章までと考えられ、40章以下は、前6世紀、バビロン捕囚から解放されてユダヤ帰還事業が進められる時代に「イザヤの伝統」を継承すると自認する「祭司=預言者集団」によって告げられ、「イザヤの預言の書」に付加されたものと考えられている。前者を「第一イザヤ」、後者を「第二イザヤ」と呼ぶことが通例となっている。日課箇所は、「第二イザヤ」に含まれる。

・「第二イザヤ」は、キュロス王率いるペルシアが台頭して、バビロニア帝国を滅ぼし、世界帝国を建設していく時代を背景としている。ペルシア帝国は、アッシリアやバビロニアが取って来たバビロン捕囚に象徴される諸民族支配政策を大きく転換し、支配下の民族集団に一定の自治を認めると共に自発的服属を誓わせる政策を取り、捕囚民の解放と帰還を進めた。バビロニア帝国ネブカドネツアル王に滅ぼされた南王国の末裔集団は、バビロンに捕囚民として移住した者とエジプトに亡命した者と共に大別されるが、ペルシア支配下で捕囚を解かれてユダヤに帰還し、エルサレムの再建を目指すことになったのは、おもにバビロンに居留していた者たちで、ペルシア王によってユダヤの指導者としての立場を認められたのは、元王族のゼルバベルや祭司職家系のヨシュアなどの人物、またペルシア王に王宮官吏として仕えるようになっていた者たちである(エズラ記、ハガイ書、ゼカリヤ書などを参照)。彼らは、ペルシア王によって「ユダヤ総督」等として派遣された立場であり、必ずしもユダヤ人社会全体の支持を背景としていたわけではなかった。「イザヤ書」を編纂した「祭司=預言者集団」は、このユダヤ帰還・エルサレム再建事業に祭司身分として参与するようになった者たちで、すでにバビロンやエジプトでの長期にわたる居留で生活基盤を確立しユダヤ帰還の積極的動機を持たない人々に対して、この事業に参与させるための歴史的・神学的な意義付けを示すことを目的として預言が告げられている。

・日課箇所では、ユダヤ帰還・エルサレム再建事業への参与を呼びかける対象に対して、自分たちの民族的ルーツを想起させることから、呼びかけが始められている。「アブラハムとサラ」をユダヤ民族のルーツとする歴史観は、正典「律法」の構成に符合する。歴史的に南王国を構成していたのは「ユダ族」と「ベニヤミン族」、また祭司身分の母体となる「レビ族」であった。「ユダ族」は、自らのルーツをもっぱら「ダビデ王族」に帰していた。「ベニヤミン族」は北部諸部族が共有する「族長ヤコブ」に自らのルーツを見いだしていたと考えられる。また「レビ族」は、出エジプト伝承や「神の箱」継承の担い手として「モーセ(とアロン)」をルーツに位置づけていた。これら異なるルーツを束ねるのが、より古い時代に位置づけられる「族長アブラハム」である。このようにさまざまなルーツを持つ部族・民族が複合的な民族集団を形成しようとするとき、より古い時代に遡る父祖を共通のルーツとして位置づけようと試みることは、よく知られている。それは、単に政治的目的のための恣意的な歴史観に留まることもあるが、正典「律法と預言者」が構想するのは、そこに、歴史的に働かれた神の計画を見いだそうとすることである。神が一貫した計画をもって一つの「民=共同体」を存続させたとすれば、その歴史が長期に渡ればわたるほど、その真実性は確かなものとされるのである。そこで、この歴史観に基づく叙述は、「世界の始まり」と「人の創造」にまで遡って拡張されることになるのである。

使徒書日課(1コリント 15章より)

・「コリントの信徒への手紙一」は、「パウロ書簡集」の第二に置かれた書簡文書。使徒パウロが、自らも創設に携わったコリントの教会共同体に宛てて記した一連の書簡の一つ。パウロは、当初、コリントの教会共同体に対して自らが指導者としての責任を負う者であることを強く自負した立場から発言していた。本書簡も、概ねそのような立場からの叙述となっている。しかし、実際には、コリントの教会共同体形成には当初から、ローマの教会共同体に属するユダヤ人夫妻アキラとプリスキラのような人々が多数、協力しており、パウロを自分たちの指導者とは考えない人々も少なくなかったと推認される。特に、使徒ペトロらの指導下にあったローマの教会共同体の出身者の中には、パウロがコリント来訪前に、使徒ペトロらと近いバルナバの指導を離れて独自の活動を進め、マケドニア伝道などに携わっていたことから、パウロ個人やその教会観に対して疑念を持つ者も少なくなかったと考えられる。パウロは、本書簡執筆時には、そのような自分に対して向けられる疑念を必ずしも十分に認識していなかったと考えられるが、それでも、教会が分派活動によって分裂してしまうことを回避するための教会一致の考えを、使徒を通して受け継いだ「主の教え」に基づいて主張しようと試みている。日課箇所の15章は、使徒からの伝承の中でも「最も大切なこと」(15:3)として「復活伝承」を取り上げ、教会論的展開を試みている。

・15 章でパウロが展開する「復活」に関する論考は、必ずしも成功していない。パウロは、「ローマの信徒への手紙」でも展開する「アダム=キリスト」論で「死と復活」を解釈して見せているが(15:22)、教会共同体で実践されていた「死者のために洗礼を受ける」(15:29)ことを取り上げたことによって、「死者はどんなふうに復活するのか」という問題に触れなくてはならなくなり、論考が大きく逸れ、飛躍してしまっている(35節以下)。そこでは、ある種のギリシア的霊肉二元論に基づく「復活の体」が描かれることになり、パウロ自身、必ずしも説得的に語れていないと自覚した結果、日課箇所冒頭の言葉が出てきたのである。

・日課箇所ではパウロは、死者の復活を、「神の国を受け継ぐ者となること」という論点に集約して説明することを試み、「罪=死の克服としての復活」という観点を提示して論考を集結させている。

福音書日課(ルカ 24 章より)

・日課箇所は、「エマオへの途上」として知られる復活顕現伝承逸話の後半部、エルサレムに終結した弟子たちのもとに復活者イエスが現れられたという出来事を描く場面の一部。前週の日課箇所では、弟子たちは既に一つ所に終結し、経験した復活顕現の出来事を共有し始めていた(33~35節)。

・日課箇所では描かれる逸話には、「ヨハネ福音書」が伝える復活顕現伝承逸話と共通する素材が見いだされる。すなわち、現れた復活者イエスが「あなたがたに平和があるように」と告げられること(36節、ヨハネ 20:19~21,26)、疑う弟子たちに対して「わたしの手や足を見なさい。…触ってよく見なさい」と促すこと(38~39節、ヨハネ 20:25,27)、イエスが焼き魚の食事を共にされること(41~43節、ヨハネ 20:12~13)、などが共通の伝承素材に基づくと考えられる。

・「亡霊」(37節、39節)と訳されている語は「プネウマ」で、通例は単に「霊」と訳される。この語に「聖(ハギア)」が付されれば「聖霊」、「主(キュリオス)」が付されれば「主の霊」などと用いられる。しかし、「プネウマ」という語自体は、物質的な実体を把握し難い存在全般を広く指して用いられる語で、語源的には「風」を意味する語「プネー」と同根である。「ルカ福音書」は、「霊」を多様に用いており、日課箇所では、おそらく、「存在していると思われるが実体として掴みどころのないもの」という一般的な意味で用いている。一方で、「ルカ福音書」では、主イエスの福音宣教の始まりの場面(4章)で、「イザヤ書」を引用して「主の霊がわたしの上におられる」(4:18)と主イエスが宣言されたこととなっており、降誕物語における「聖霊による受胎」と共に、主イエスを「神の子」として特徴づけるしるしとなっている。「ルカ福音書」の続編である「使徒言行録」は、これを受けて「主の霊」を「聖霊」や「イエスの霊」と共に弟子を導く存在として描いている(使徒 5:9、8:39)。

来週の誕生日 (4月23日~29日)

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-320 番「ハレルヤ、ハレルヤ(息子よ、娘よ)」は、15世紀フランスのフランシスコ会修道士ティセラン作とされているラテン語聖歌で、福音書の物語る復活の出来事を歌っている。曲は同時代のフランス民謡曲から取られている。
- ・21-425 番「こすずめも、くじらも」は、1983年、米国ミズーリ州のコンコーディア・ルーテル教会の設立110周年記念のために新しく作られ(作詞作曲は82番「今こそここに」と同じコンビ)、後に諸教派の讚美歌集に採用された。
- ・21-561 番「平和を求めて」は、19~20世紀に米国でユニテリアン派の牧師として活動したジョン・ホームズの作詞。曲は、19世紀英国教会の司祭として多くの教会音楽を作曲したジョン・B・ダイクスが別の讚美歌のために作曲したもの。

21-320「ハレルヤ、ハレルヤ(息子よ、娘よ)」

O filii et filiae

English translation O Sons and Daughters

21-425「こすずめも、くじらも」

God of the Sparrow

1. God of the sparrow / God of the whale / God of the swirling stars / How does the creature say Awe / How does the creature say Praise
2. God of the earthquake / God of the storm / God of the trumpet blast / How does the creature cry Woe / How does the creature cry Save
3. God of the rainbow / God of the cross / God of the empty grave / How does the creature say Grace / How does the creature say Thanks
4. God of the hungry / God of the sick / God of the prodigal / How does the creature say Care / How does the creature say Life
5. God of the neighbour / God of the foe / God of the pruning hook / How does the creature say Love / How does the creature say Peace
6. God of the ages / God near at hand / God of the loving heart / How do your children say Joy / How do your children say Home

21-561「平和を求めて」

God of the Nations, near and far

1. God of the nations, near and far, / Ruler of all mankind, / Bless Thou Thy people as they strive / The paths of peace to find.
2. The clash of arms still shakes the sky, / King battles still with king— / Wild through the frightened air of night / The bloody tocsins ring.
3. But clearer far the friendly speech / Of scientists and seers, / The wise debate of statesmen and / The shouts of pioneers.
4. And stronger far the clasped hands / Of labor's teeming throngs, / Who in a hundred tongues repeat / Their common creeds and songs.
5. From shore to shore the peoples call / In loud and sweet acclaim, / The gloom of land and sea is lit / With Pentecostal flame.
6. O Father! from the curse of war / We pray Thee give release, / And speed, O speed the blessed day / Of justice, love and peace!